現代日本語におけるモダリティ副詞マサカの意味と用法の変遷

小　池　　康

1．はじめに

本稿は，明治期以降における，いわゆるモダリティ副詞の変遷過程の解明およびそのモデル化を目指す研究の一環[*1]として，マイやナイダロウといったいわゆる「否定推量」の形式[*2]と共起するとされる副詞マサカに関する論考である。本稿では，まず意味の規定をした後，明治期以降，意味および共起形式がどのように変遷していったのかということに関して，資料に基づき考察を試みる。なお，適宜，マサカと類義関係にあると思われる副詞ヨモヤについても言及する。

2．モダリティ副詞マサカ・ヨモヤ

モダリティに関する研究の中には，モダリティを命題に対する概念として設定し（仁田1991，1997，益岡1991，中右1994）[*3]，概略「話し手の発話時点における心的態度」と定義するものがある（仁田1991，1997，益岡1991，2000，中右1994）。本稿における立場も基本的にこれを踏襲することとし，モダリティを「発話時における，命題に対する話し手・語り手の主観的な判断・態度を表すカテゴリー」と定義しておく。そして，それが副詞として具現化されたものを「モダリティ副詞」と呼び[*4]，また，主に文末の助詞・助動詞などの形式として具現化されたものを「モダリティ形式」と呼ぶことにする。

モダリティ副詞としてのマサカの位置づけについて，森本(1994：73)は，「話し手の主観を表す副詞（SSA副詞）」にマサカを含め，「話し手の側の推量的態度」を持つとしている。この特徴は，「話し手の心的態度」と軌を一にするものと見てよかろう。

また，杉村(2000)は，モダリティを命題の対概念と定義づけた後[*5]，マサカ

が「話し手の心的態度」および「発話時点での心的態度」を表すことから，マサカをモダリティ副詞と認定している。さらに，四つの「主観性判定テスト」[*6]を行い，その結果においてもマサカがモダリティ副詞であるとしている。

これらの先行研究の結果を踏まえ，本稿ではマサカをモダリティ副詞として扱う。

ヨモヤに関する個別的な研究は管見の限り見出せなかったが，辞典類においては，マサカの関連語としてヨモヤを挙げているものが多く見られた（森田1989，小学館辞典編集部1994，飛田・浅田1994）。本稿では，ヨモヤもマサカと同じくモダリティ副詞に属するものと見なしておく。

3．マサカとヨモヤの意味記述

マサカは，先行研究において大きく三つの用法－「副詞的用法」「名詞的用法」[*7]「感動詞的用法」（森田1989，小学館辞典編集部1994，飛田・浅田1994）－に分けられて記述されている。このうち，モダリティ副詞としてのマサカに関連すると思われるのは，副詞的用法と感動詞的用法である。

副詞的用法の記述を見てみると，森田(1989)や森本(1994)などでは〈事態実現の可能性を否定する〉としており，また飛田・浅田(1994)では〈事態が実現する可能性が低いという判断〉としている。これらは，いわば「事態成立の可能性を否定する表現」（杉村2000）としてまとめられるものである。

（1）　まさかみちこは東京にいないだろう。（森本1994の例16ｂ：71。下線は筆者，以下同）

（2）　すでに交渉が成立しているとは，やり手の彼でもマサカ気がつくまいよ。（飛田・浅田1994の例（1）②を一部改変）

これに対し，杉村(2000)は，マサカを「当該の事態が想定外のものであることを表す表現」と見る。このような見方は，下例（3）のマサカが「事態成立の可能性」を否定しているとは言えず，「単に当該の事態が『想定外』のもの」を表しているに過ぎないと捉えられることに依拠している。

（3）　マサカ太郎が謝るとは思わなかった。（杉村2000の例3）

そして，杉村(2000)は「想定外」を以下のように規定する。

1．当該の事態の成立について特に考えていなかった場合に，当該の事態が成立する

2．当該の事態の成立する可能性を否定していた場合に，当該の事態が成立する

3．他の事態の成立する可能性を考えていた場合に，当該の事態が成立する

これら「想定外」の意味が，推量や道理を表す文脈に現れると，「当該命題の成立する可能性を否定しようとする話し手の強い心的態度」を表すようになり，「事態成立の可能性を否定するという意味は，文末の『ハズガナイ』や『マイ』に帰せられると考える」としている。このように杉村(2000)は，「想定外」を先行研究における「事態成立の可能性の否定」よりも，より本質的な意味特徴として設定している。

しかし，杉村(2000)の「想定外」の三つの規定は，すべて「当該の事態が成立する」場合に関してであり，実際には事態が成立していない，もしくは成立する／したかどうかわからないという場合も考えられ，その場合は「想定外」には該当しなくなると思われる。

（4）　私は，マサカ本当に宇宙飛行士になれるとは思わなかった。

（5）　マサカ社長にそんなことは言えないよ。

（6）(＝(2))　すでに交渉が成立しているとは，やり手の彼でもマサカ気がつくまいよ。

(4)では，「私」は実際に宇宙飛行士になれたという意味も含意されており，その点で事態が成立していると言える。これは，杉村(2000)での「想定外」の規定2に該当するものと思われる。しかし，(5)では「そんなことを言う」という事態は実際には成立しておらず，また(6)では「彼」が気がついているかいないかの実際のところまでは含意されてはいない（つまり，事態が成立したか否か不明)。その点で，これらの例は事態が成立しているとは言えず，杉村(2000)の規定からは外れることになる。(5)と(6)は，「想定外」という意味よりも，むしろ〈私が社長にそんなことを言う（言える）可能性の否定〉〈彼が気がついている可能性の否定〉といった意味－すなわち「事態成立の可能性の否定」－の側面が強いと思われる。

以上のことから，本稿では，マサカの副詞的用法に「事態成立の可能性の否定」と「想定外」の二つの意味を認めておくことにする。

なお，マサカが「想定外」の意味で用いられる場合の特徴としては，①文の主体が話者である，②主体は，成立することを否定していた，もしくは特に考えてはいなかった事態が現実に起こる／起こったと認識している，の二点が考

えられる（5．1参照）。そして，この二点が同時に伴わない場合は「事態成立の可能性の否定」の意味になるものと思われる。

感動詞的用法は，用法としては「応答詞として用いる」（森田1989：1057）とされるが，直観的にマサカに後続成分を補充することも可能である（下例7b）点で，副詞的用法と連続性が認められるものと考えられる。

（7）a　あなたなら百問ぜんぶ答えられるでしょう／まさか（森田1989の例：1057）

b　あなたなら百問ぜんぶ答えられるでしょう／まさか［そんなことはできないでしょう，など］[*8]

ただ，意味としては，副詞的用法と異なり，「事態成立の可能性の否定」のみを有しているように思われる。

（8）「彼は大学を辞めたよ。」「マサカ。」

（9）「泣いた？」「泣いたよ」「だれが？」「まりちゃんが，だよ」「わたしが？　まさかあ」〈中略〉「ほんとうにおぼえていないのかい？」（もう頬づえはつかない22）

（10）「全国チェーンだから，社長がお抱えパイロットに操縦させて飛び回ってるのかな」「まさか」（女たちのジハード411）

いずれの例も，話者は相手の発話内容の事態が現実に起こる／起こったとは認識していないという点で，先の「想定外」の特徴②「否定していた，もしくは特に成立することを考えていなかった事態が現実に起こったと認識している」にはあてはまらない。むしろ，相手の発話の事態が現実に成立する／した可能性を否定していると思われるので，「事態成立の可能性の否定」の意味になると思われる。

感動詞的用法のマサカが「想定外」を表わすとしたならば，先の特徴②より，話者は相手の発話内容の事態が現実に起こったと認識していなければならず，これは相手と同じように事態を認識している，つまり相手に同意していなければならない。しかし，マサカには同意を表わす用法は想定できないので，結果，感動詞的用法では「想定外」は認められないのである。以上のことから，マサカの感動詞的用法は，「事態成立の可能性の否定」のみを表わすと思われる。

ヨモヤに関しては，前節でも述べたように，マサカの関連語という位置づけで意味記述がなされている場合が多い。その点で，意味記述もマサカと類似したものとなっている。たとえば，「まず実現性のないという判断」（森田1989：1057），「実現の可能性が非常に低いという主体の判断」（飛田・浅田1994：586）

などのようにである。これは，マサカの副詞的用法の「事態成立の可能性の否定」と同一線上にあると言える。

(11)　ヨモヤみちこは東京にいないだろう。(cf.(1))

(12)　すでに交渉が成立しているとは，やり手の彼でもヨモヤ気がつくまいよ。(cf.(2))

(13)　ヨモヤ太郎が犯人ではないと思う。

また，「想定外」の意味に該当する例も考えられる。

(14)　ヨモヤ太郎が謝るとは思わなかった。(cf.(3))

(15)　私は，ヨモヤ本当に宇宙飛行士になれるとは思わなかった。(cf.(4))

このように，ヨモヤとマサカは共に「事態成立の可能性の否定」と「想定外」の意味を持っているものと考えられる。

先行研究には，ヨモヤがマサカと異なる意味用法として，主に目上の人に向かって，自分の強い否定の意志を表す用法を認めるものがある（森田1989，小学館辞典編集部1994）。

(16) a　先生を裏切るなんて，ヨモヤそんな事はいたしません。(小学館辞典編集部1994の例に一部補足)

b　ヨモヤ先生のご恩は一生忘れません。

ただし，禁止文に対する否定意志の応答を想定した場合，ヨモヤは感動詞的用法としては用いられにくいと思われる。

(17)　「あの場所には行くな。」「ゼッタイ。／決シテ。／*ヨモヤ。」

このような現象より，否定意志はヨモヤ自体にあるのではなく，ヨモヤに後続する成分の影響によるものと考えられるので，本稿ではヨモヤに否定意志の意味は認めない立場を取る。ちなみに，(16)のヨモヤは，「事態成立の可能性の否定」であると思われる。

以上をまとめると，マサカもヨモヤも，副詞的用法の場合はともに「事態成立の可能性の否定」「想定外」といった意味が想定できるが，感動詞的用法はマサカにのみ見られ，「事態成立の可能性の否定」のみを意味すると思われる。

なお，これら「事態成立の可能性の否定」と「想定外」という意味は，主体の主観的な否定判断を表わすという点で，モダリティの要件を備えていると考えられ，いわゆる「判断のモダリティ」（近藤1989，仁田2000，益岡2002）[*9]にカテゴライズされるものと考えられる。それゆえ，本稿では適宜，この両義の持つモダリティを「否定判断のモダリティ」と呼ぶことにする[*10]。

さて，以上は，主に現代におけるマサカとヨモヤの意味・用法の記述であるが，この二語が明治期以降も現代と同じような類語関係にあったのかどうかに関して確認しておこう。

明治43(1910)年刊『日本類語大辞典　第三版』によると，マサカの項には「『よもや』を看よ。」とだけあり，ヨモヤは，「(よしやそうあらふとも)。よも。やはか。まんざら(萬更)。まさか。まさかに。」となっている。また，浅野(1943：385)では，「まさか－實か」で立項されており，「一口には『よもや』といふのに當る。」と記されている。これらを見る限りでは，マサカはヨモヤの下位類に位置づけられているように思われる。

この両副詞の上下関係についてはさておき，いずれにせよマサカとヨモヤは，本稿の対象とする明治期以降，互いに類語関係として認識されていたと見て差し支えないと思われる。

4．資料

本稿では，明治期から現代までの小説，特に庶民向けに書かれたとされる大衆文学（大衆小説）を中心に資料とした*11。

このジャンルより資料を選定した理由は，これらの小説が大衆の風俗を描いた大衆向けの娯楽小説であり，その意味で大衆に認知されやすいような表現がより多用されるのではないかと考えられたためである*12。

分析の手法としては，作者の生年順によるものと作品の発表年順によるものの二つの方法が考えられる。今回の調査では，同じ作者がある期間離れて発表した作品の用例を比較してみると，用法に若干の変化が見られるものがあった*13。このことから，本稿では作品の発表年順により分析を進めていくことにした。

各作品は，分析の便宜を考え，以下のように四つに区分することとした。この区分は，松村(1998ｂ)で提唱された時期区分*14を参考に設定したものである*15。

「明治期」：明治21(1888)年から明治45・大正元(1912)年の23年間
「戦前期」：大正２(1913)年から昭和20(1945)年の32年間
「戦後期」：昭和21(1946)年から昭和48(1973)年の27年間
「現代期」：昭和49(1974)年から平成12(2000)年の26年間

昭和21(1946)年から平成12(2000)年までの55年間ついては，他期の長さとのバランスを考え，大きく二つに分け，それぞれ「戦後期」「現代期」とした。なお，「明治期」が明治21年からなのは，瀬沼(1965)や浅井(1978ａ）などの，この時期より小説が「純文学」と「大衆文学」に分化されるようになっていったという言及をも反映している。

資料は基本的に作品の初版本とし，入手できなかったものに関しては全集などを用いた。資料は42名の作家の58作品である(資料の詳細は本稿末に記載)。

5．マサカの史的変遷

調査の結果，得られた用例数は，マサカが386例[*16]，ヨモヤが13例[*17]と極端な違いが見られた。この結果を受け，本章ではマサカを中心に考察を進めていくことにする。

5．1．意味別の出現傾向

マサカの意味のうち，「想定外」と思われる用例には，次のような特徴が見られる。

1．文の主体が話者である。

2．主体は，成立することを否定もしくは特に考えていなかった事態が現実に起こる／起こったと認識している。

また，構文的に〈トハ（ナンテ・ナド）＋思考動詞＋ナカッタ〉のような形と共起している場合が多い[*18]。

(18)　狡猾(ずる)い奴た知つてたが，まさか彼(あん)様な嫌疑を受けようとは思はんかつた，(不如帰40上)

(19)　～，あなたがあの時，少し考へさせてくれと仰しやつたのは，まさかそんな深いご厚意とは想像もしなかつたのですよ。(緑の路49下)

(20)　好景気のとき，都心のマンションを買った。そんなものが家庭崩壊につながるとは，まさか考えてもいなかった。(鉄道員253)

(21)　結婚してからずっと夫の収入は安定して増えていたので，まさかこんなことになるなんて思ってもみなかった。(プラナリア134)

(22)　雪子や菊池に言われるまで，私には缶蹴りの記憶のある日が，まさかあの台風の日と重なっていたなど考えもしなかったのである。(緋い記憶111)

いずれの例文も述語（波線部）の主体が話者である点で，特徴１を満たす。そして，たとえば(18)では，特に考えてはいなかった事態〈彼様な嫌疑を受けること〉が現実に起こった（実際に嫌疑を受けた）ということが含意されている（特徴２）。他の例文も，同様に捉えることができるであろう。

このような「想定外」と思われる用例は，マサカ386例中46例(11.92%)で，明治期：６例(7.14%[*19])，戦前期：９例(8.74%)，戦後期：６例(11.69%)，現代期：25例(20.49%)と，現代期になって用例数・比率ともに増えていた。なお，〈トハ（ナンテ・ナド）＋思考動詞＋ナカッタ〉と共起していた例[*20]は34例（「想定外」のうちの73.91%；明治期：３例，戦前期：８例，戦後期：４例，現代期：19例）見られた[*21]。

このように，今回の調査では「想定外」の用例は１割強しか見られなかった。逆に言えば，マサカは「事態成立の可能性の否定」で用いられている用例が大半を占めているという結果であった。

しかし，「想定外」の用法も現代期に入って大きく用例数が伸びていることから推察すると，今後，マサカの「想定外」の用法が増加していくという可能性は考えられる。

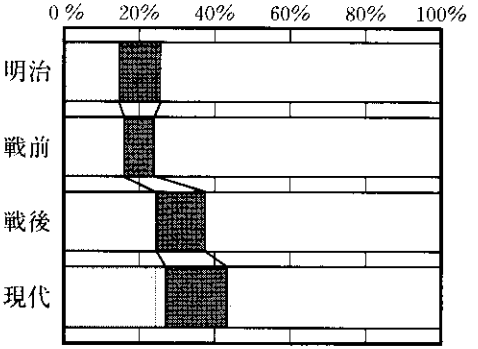
なお，ヨモヤは，13例すべてが「事態成立の可能性の否定」であった。

５．２．地の文・会話文等における出現傾向

本節では，マサカが地の文・会話文・描出文[*22]のどの文でよく見られるかを確認しておこうと思う。なお，手紙文での用例も見られたが５例のみであったので除外して考察を進める。

図１を見ると，時代が下るごとに地の文への出現傾向が高くなっていることがわかるが，やはり中心は会話文での使用ということになろう。

ちなみに，ヨモヤは，13例中11例が明治期に出現し，地の文では３例，会話文では８例と，マサカと似たような傾向を見せた（後の２例は，手紙文（戦後期）と地の文（現代期））。このことより，マサカとヨモヤの用法の違いにおいて，出現する文の違いという側面は考えにくいということになる。



	明治	戦前	戦後	現代	計
地の文	12	16	19	33	80
描出文	9	8	10	20	47
会話文	61	76	48	69	254
	82	100	77	122	381

図１　地の文等の違いによるマサカの出現傾向

５．３．共起形式別の出現傾向

５．３．１．共起形式の変遷

マサカの用例を形式面より見てみると，大きく三つのパタンに分かれる。第一はマイ，ナイダロウ類[*23]，ナイといった形式と共起する用例群，第二は述語まで言い切らない「言いさし」の用例群，第三にマサカが一語のみで用いられる感動詞的用法（以後，適宜「一語文」と呼ぶ場合がある[*24]）の用例群である。

(23) 否定形式と共起する用例[*25]

a　「無理に伴(つ)れて來たと云つて，豈夫(まさか)，曳摺(ひきず)つて來たんぢやあるまい，貴女も承知で來たんだらう，（魔風戀風120上）

b　まさか，凛子は本気で死ぬことを考えているわけではないだろう。なにやら不吉な予感にとらわれて寝室へ戻ると，凛子は軽く横向きのまま眠っている。（失楽園270）

c　が，まさか，誠太郎の口車にのつて，こちらの秘密を，うち明けることもない。（雪夫人絵図47下）

d　みんなで殺しちゃおうかって冗談言うんですけどね，まさかそんなことも出来ないし」（恍惚の人299）

(24) 言いさし[*26]

a　變と思つたですが，まさか母上(おつかさん)が其様な事を —— 實にひどい ——」（不如帰84上）

b　「でも，私，まさか村川さんが。」(第二の接吻75下)

c　なにげなくテーブルの上に新聞を広げると，さっき読みかけの誘拐事件の記事が眼に映った。　真樹子の顔が曇った。　「まさかあの人……」(ナポレオン狂49)

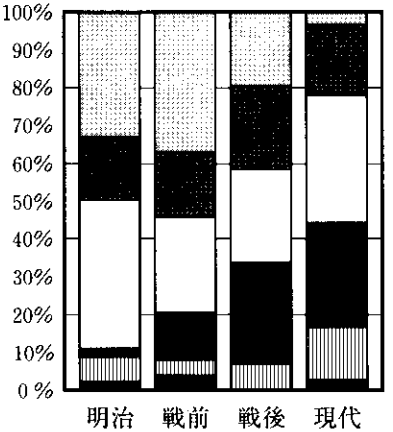
(25)感動詞的用法

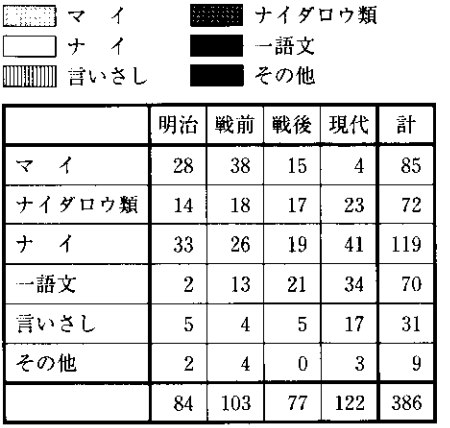
a　ぢや，何のために，這入つたのか。盗み！　まさか。(火華618下)

b　「僕は道子を棄ててゐます」　「まさかね。(武蔵野夫人112下)

c　「嬉しいね。あの感じじゃ無理だろうと諦めていたんだ。どういう風の吹きまわしだ」〈中略〉「初恋の女が利いたかな」　「まさか。町が見たくなっただけさ」(緋い記憶21)

以上の三つのパタンを中心に，マサカの用例の傾向を図2に示す。





	明治	戦前	戦後	現代	計
マ　イ	28	38	15	4	85
ナイダロウ類	14	18	17	23	72
ナ　イ	33	26	19	41	119
一語文	2	13	21	34	70
言いさし	5	4	5	17	31
その他	2	4	0	3	9
	84	103	77	122	386

図2　マサカの共起形式の変遷傾向

図2より，以下のような点が指摘できるであろう[*27]。

1．マイやナイダロウ類と共起している例が，明治期や戦前期では50%近くを占めていたのに対し，戦後期・現代期になるに従い，占める割合が減少している。特に，マイの占める割合は，戦後期以降，激減している。これに対し，ナイダロウ類は全時期を通じて15～20%程度の割合で安定

している。

2．一語文での用例が，戦後期・現代期へ至るほど多くなっている（実数では時代ごとに増加している）。

3．現代期において，言いさしの用例が増加している。

この結果を踏まえ，次節で1に関して，そして5．3．3において2と3に関して，考察を進めていくことにする。

なお，否定判断のモダリティ副詞マサカと共起する場合の共起形式マイ，ナイダロウ類，ナイは，主体の主観的な否定判断を表わしていると言えるので，「否定判断のモダリティ形式」と呼ぶことが可能であろう[*28]。以下，適宜，この用語を用いる。

5．3．2．マイとナイダロウに関して

本節では，マサカの共起形式のうち，マイとナイダロウ類の出現傾向の差異について考察する。マイとナイダロウ類は同じ否定判断のモダリティ形式と見なしうるものであるのに，戦後期を境にマイの使用比率は減少傾向にあり，現代期に至っては3％程度（4例／122例）しか占めていない。

では，なぜマイは減少したのだろうか。

田中(1981)には，マイに関して，次のような記述が見られる[*29]。

> 現代語では，ほとんど用いられなくなったが，近世語においては，打消の推量と意志を表す助動詞「マイ」が，大いに活躍している。それが，明治中ごろから，少なくとも推量の意味では，あまり使われなくなり，推量の場合は「行かナイダロウ」のように，打消と推量の分離した形が普通になってきた。その結果，「マイ」は，もっぱら意志のみを表す単純な助動詞に転じる傾向が強まってきた。これも，のちに，「行かナイ・ツモリダ」とか「行くのはヤメ・ヨウ（ヨソ・ウ）」といったような，打消を表す単位と意志を表す単位とが分かれた表現が幅をきかせてくるにしたがって，衰えていった。

そして，田中(1981)は，このような「複雑な表現内容をもつ要素」（ここではマイ）が，次第に単純な要素に分けられて，そのコンビネーションで表す（ここではナイダロウ類）という傾向を「分析的傾向」[*30]と名付けている。

本稿における結果は，まさにこの「分析的傾向」を反映したものと言えるであろう。

ただし，田中(1981)ではマイがナイダロウに代わった時期を明治中期として

いるのに比べ，今回の調査結果では戦後期でほぼ同比率になったという点で，時期にズレが見られる。

これは，マサカの影響ではないかと推察される。すなわち，“マサカ～マイ”が，「限界を仮定しての意味を強める用法」（吉田1971：308[*31]）として，いわば「呼応」（工藤2000：209）のように認識されていたため，ナイダロウ類への移行がマサカを共起させない文の場合よりも遅れたのではないかと考えられる[*32]。

5．3．3．一語文で用いられるようになるということの意味

本節では，5．3．1の図2において，戦後期・現代期と時期が下るにつれて，一語文や言いさしの用例が増加している点について考察する。

モダリティ副詞の中には，本稿でのマサカのように一語文や言いさしで用いられる副詞もあれば，一語文などでは用いられにくい副詞[*33]もある。

このような違いは，当該の副詞におけるモダリティの「やきつけられかた」（工藤2000：208）の程度の違いに起因していると考えられる。モダリティ副詞が一語文として用いられる（そして，そのような用法が許容される）には，当該の副詞に特定のモダリティがやきつけられており，さらにはその副詞が単独で用いられても，話者もしくは書き手の主観的な態度や判断を表わしうるという認識が確立していなければならない。

小池(2002)では，副詞の語彙的意味にモダリティがどの程度やきつけられているかによって，当該の副詞が一語文で使用された場合に許容度が変わる旨を指摘している。

> 副詞が一語文で用いられるということは，その副詞だけでその語彙的意味であるモダリティを伝達できるということである。逆に，単独で用いるのが不自然であれば，モダリティが語彙的意味にやきつけられていないということになろう。

本稿の調査結果と照合すると，明治期ではマイ・ナイダロウ類，ナイなどといった否定判断のモダリティ形式と共起していたマサカだが，時代が下るに連れ，否定判断のモダリティがマサカにやきつけられて，マサカは一語でも用いられるようになっていったのではないかと考えられる。

ただし，モダリティのやきつけられた程度が充分であれば，マサカはどんな述語とも共起可能のはずである。しかし，実際には制限が見られる。

(27) a　マサカプロポーズなんてできない。

b＊ マサカプロポーズできる。

(28) a　タブンプロポーズなんてできない。

b　タブンプロポーズできる。

マサカが否定判断のモダリティを持つからといって，(27 b)が「プロポーズはできない」を意味するようにはならない。

このような現象より，マサカは一語文で用いられる程度にはモダリティのやきつけられ度は強いものの，どんな述語とも共起ができるほどにはやきつけられ度は強くはなっていないと言える[*34]。

タブンでは，肯否とは無関係な推量のモダリティがやきつけられているため平叙文においては制約は見られないが，マサカは否定に限定された判断のモダリティがやきつけられているため，肯定文には出現しにくいという制約がある。この制約が，マサカを多様なモダリティ形式と共起させるという方向よりも，一語文として用いる方向へと向かわせていったのではないかと考えられる。

では，なぜマサカにこのようなやきつけられかたが生じたのであろうか。ひとつには，否定判断のモダリティとマサカが一対一の関係で認識されるようになったためということが考えられる。たしかに類語にヨモヤがあるが，本稿における調査結果からもわかる通り，この両語の用例数には大きな差がある。このことより，マサカがヨモヤを凌駕し，否定判断のモダリティとマサカとの関連性が強く意識されるようになっていったということが考えられる[*35]。

では，なぜヨモヤはマサカに凌駕されたのか。

この点に関しては，本稿の調査結果からだけでは，得られた用例が少なすぎるということもあり，現段階では何とも推察がつかない。意味もほぼ同じであり（3章参照），また会話文への出現傾向が高い（5．2参照）など，用法にさほど大きな違いが見られないこの両副詞が，なぜ使用数に大きな差が生じたのか，今後の課題として残しておきたい。

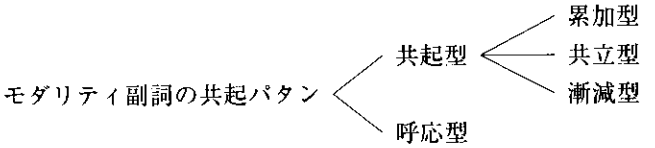
6．モダリティ副詞の共起パタンにおけるマサカの位置づけ

最後に，本稿で扱ったマサカが，モダリティ副詞の共起関係に主眼を置いた諸パタンの中で，どのように位置づけられるのかを見ておきたい。

モダリティ副詞と共起形式との関係には，いくつかのパタンが想定できる。たとえば，複数のモダリティ（形式）と共起する副詞もあれば，ある特定のモダリティ（形式）とのみ共起する副詞があったり，さらに史的に見た場合，時

代の変遷に伴い共起するモダリティ（形式）の種類が増加したり，減少したりする副詞が見られる。

小池(2002)では，このようなパタンを「モダリティ副詞の共起パタン」として提示している。



「共起型」は異なるモダリティ(形式)と共起するのに対して，「呼応型」は一つのモダリティ(形式)と共起するという点で分立される。

「共起型」の下位類である「累加型」とは，ある一つのモダリティ（形式）と共起する割合が高かったものが，時期の変遷に伴い，他のモダリティ(形式)とも共起するようになっていくタイプの副詞である。「共立型」は，時期の変遷にかかわらず，複数のモダリティ（形式）が一定の割合で共起するタイプの副詞である。「漸減型」は時代の変遷に伴い，共起するモダリティ（形式）が減少していくタイプの副詞である[*36]。

図2より，マサカの共起関係を見てみると，〈マサカ～マイ・ナイダロウ／ナイ〉→〈マサカ。〉（＝一語文）→〈マサカ…。〉（＝言いさし）のように，明治期には具体的な形式を共起させていたものが，時代を経るに従い一語文や言いさしの用例が増加している傾向，すなわち時代が下るに従い具体的に共起するモダリティ形式の種類が漸減しているという傾向が認められる。

このことより，マサカは「漸減型の副詞」と位置づけられるであろう。

現在までのところ，漸減型に該当する副詞はマサカしか得られておらず，その意味で一語文化の傾向が漸減型の副詞に特徴的なのか，マサカに特徴的なのか確固としたことは言えない。しかし，他の型が，共起型にしろ呼応型にしろ，何らかのモダリティ形式を共起（呼応）させている点を考慮すると，マサカの漸減型・一語文化といった特徴は，他のモダリティ副詞とは異なる共起パタンを見せており，モダリティ副詞の中でも特殊な変遷を経ていると言えるのかもしれない。

7．おわりに

明治期以降のマサカについて，本稿で得られた知見についてまとめておく。

本稿では，マサカの副詞的用法および感動詞的用法について扱った。意味としては，副詞的用法の場合は「事態成立の可能性の否定」と「想定外」が想定できるが，感動詞的用法では「事態成立の可能性の否定」のみであると考えられる。このうち，副詞的用法での「想定外」の意味は，全体としては1割程度しか見られなかったが，特に現代期においてその用例数および比率が増加している傾向が見られることから，今後，その頻度が増す可能性が考えられる。

モダリティ形式との共起関係については，まず明治期にはマイやナイダロウ類といった否定判断のモダリティ形式と共起する用例が半数近く占めていた。しかし，時代が下るに連れ，具体的なモダリティ形式を共起させない一語文や言いさしでの用法が増加する傾向が見られた。このような傾向を持つマサカは，モダリティ副詞の共起パタンにおいては「漸減型」に位置づけられ，先行研究で扱われた推量のモダリティ副詞などとは異なる共起パタンを見せていることがわかった。

注

＊1　小池(2002) 参照。

＊2　『国語学大辞典』(1980)「副詞」の項参照。

＊3　モダリティを命題の対概念とする見方のほか，文の対象的な内容と現実とのかかわり方であるという見方や叙法論的な見方がある。宮崎ほか(2002)参照。

＊4　小矢野(1997)では，モダリティ副詞を「文の対象的な内容に対する話し手の把握のしかたや聞き手に対する伝達的な態度を表現する副詞（類）の総称」と規定している。

＊5　杉村(2000)では，モダリティを「一つの文のうち，発話時点における話し手の心的態度を表す部分を指し，話し手が切り取った客体世界の事態を描く命題と対になる概念」としている。

＊6　杉村(2000)は，モダリティと命題の違いに関して，「モダリティは発話時点における話し手の心的態度を表すため，それ自体は真偽の対象とならず，連体修飾成分ともならず，過去文の中にも収まらないという性質をもつ。一方，命題は客観的な成分であるため，こうした制限が加わらない」という観点より，以下の四つの「主観性判定テスト」を設定している；①「否定テスト：否定の対

象となるかどうか」②「疑問テスト：疑問の対象となるかどうか」③「連体修飾テスト：連体修飾成分となるかどうか」④「過去テスト：過去文の中に収まるかどうか」。マサカは，このいずれのテストにおいても非文となり，その点においてもマサカがモダリティ副詞であるとしている。

(＊6－1)＝①　＊太郎は［マサカ風邪を引かない］のではなく，引くこともある。

(＊6－2)＝②　＊太郎は［マサカ風邪を引かない］のですか，引くこともあるのですか。

(＊6－3)＝③　＊太郎はマサカ風邪を引かない人です。

(＊6－4)＝④　＊太郎はマサカ風邪を引かなかった。

（杉村2000の例47ａ，48ａ，49ａ，50ａの引用）

＊7　「まさかの～」の形での用法。この用法は，後続する述語を修飾してはいない点で，他の用法と異なる。

(＊7－1)　まさかの時のために遺言を書いた。（飛田・浅田1994の例(2)①）

＊8　森本(1994)pp.72－73，および同書6章注11(p.80)も参照。

＊9　近藤(1989)においては，「判断のモダリティ」の下位カテゴリー「概言」に，仁田(2000)においては，「判定のモダリティ」の下位カテゴリー「概言」に，益岡(2002)においては「真偽判断のモダリティ」の下位カテゴリー「断定保留」にカテゴライズされるものと思われる。

＊10　これは「否定」をモダリティと見なすということではない。あくまでも「判断」という主体の主観性を帯びたものが，否定的な内容であったということを表わす。

＊11　家庭小説・通俗小説・ユーモア小説・中間小説などを中心に資料とした。作品は，柳田ほか(1961)，瀬沼(1965)，浅井(1978ａ，1978ｂ)，尾崎(1978，1986)，浜田(1996)，鈴木(1997)などを参考に選定した。また，太平洋戦争後の作品に関しては，直木賞作品やベストセラーなども資料選定の対象とし，長谷川ほか編(1977)，辻村(1981)，塩澤(1995)などから作品を選定した。

＊12　言うまでもなく，純文学作品や講談等といったさまざまな資料に関しても調査を行なう必要はあるが，それについては稿を改めて扱うこととしたい。

＊13　小栗風葉は，1905年に「青春」を，1925年に「緑の路」を発表したが，前者ではマイやナイダロウと共起している例が全9例中6例見られたのに対し，後者では全8例中2例であり，逆にナイという形式と共起している例が前者では1例なのに対し，後者では4例見られた。また，五木寛之は，1967年に「蒼ざめた馬を見よ」を，1986年に『旅の幻燈』を発表しているが，前者は全2例がナイダロウと共起していたのに対し，後者は全4例中3例が感動詞的用法で用いられていた。ちなみに，五木には『青春の門　第二部自立篇上』(1971)もあるが，そこでは全9例中5例が感動詞的用法で，ナイダロウは2例であった。

＊14　本稿での時期区分と松村(1998ｂ)のそれとは，次のように対応している－い

ずれも前者が本稿での名称，後者が松村(1998 b)での名称；「明治期」：「確立期」，「戦前期」：「完成期」および「第一転成期」，「戦後期」および「現代期」：「第二転成期」。なお，松村(1998 b)の分類は，1954（昭和29）年当時のものなので，「第二転成期」の区分は筆者が行なった。

＊15　松村(1998 b)の時代区分の意義については，鈴木(1986)を参照。

＊16　マサカには，マサカニという形式で実現する場合もある。マサカニには，打消表現に用いられる場合（いくらなんでも。どうあっても）と肯定表現に用いられる場合（まさしく。本当に）がある（『日本国語大辞典』より）。本稿での調査では27例見られ，その多くは明治期・戦前期においてであった。そして，そのすべては打消表現に用いられている用例であった。また，意味は「事態成立の可能性の否定」に該当するものと思われる。

(*16-1)　今から六年ばかり前の事で，娘が十九の年老猾（おやぢ）は六十約（ばかり）の禿顱（はげあたま）の事だから，まさかに色氣とは想はんわね。(金色夜叉中8)

(*16-2)　が，まさかにさうする事も出來なかつた。(空華422)

また，マサカマサカと畳語で用いられた例もあったが，これは畳語で1例として数えた。全体で2例見られた。意味は，マサカニと同様，「事態成立の可能性の否定」と思われる。

(*16-3)　「私も其だから氣を揉んでるのぢやありませんかね，お嬢様にまさかまさか（本文では躍り字；筆者注）お落度（おちど）があらうとは思ひませんけれどもね，(濱子23上)

＊17　ヨモヤには，ヨモという形式で出現する場合もある。ヨモヤ全13例中4例見られ，すべて明治期においてであった。

(*17-1)　凡そ着港當時の船の中と旅客の心の中ほど，愉快に忙しいものはよもあるまい（女夫波342上)

また，マサカの場合と同様に畳語は1例とした。全体で1例見られた。

(*17-2)　あなたと妾（あたし）とは，兄妹のやうな間柄だししますから，王子様がよもやよもや（本文では躍り字；筆者注)，悪くお取りのことはあるまいとは思ふのですけれどもやつぱし苦しいわ。(濱子73上)

意味は，ヨモ，ヨモヤヨモヤとも，「事態成立の可能性の否定」であると考えられる。

＊18　文末が非過去形の場合，「事態成立の可能性の否定」の意味になると思われる。

(*18-1)　～，自分の目が誤（ちが）つて居るか知れぬが，豈夫にあの初野が其様な堕落を爲ようとは思へぬ。(魔風戀風156下)

ただし，非過去形でも，主節が過去である文の従属節に現われた場合には「想定外」となる場合がある。

(*18-2) ―― けれど，まさかそこへ，監獄馬車がとびこんで，それから，見つかろうとは思わないから，悠長に構えこんでいたものサ」(かんかん

虫は唄う289上)

なお，杉本(2000)はマサカを「想定外」と規定したが，そこでの例文はすべて“～トハ思ワナカッタ”“～トハ考エテイナカッタ”などのように〈トハ＋思考動詞＋ナカッタ〉のような形となっている。宮崎ほか(2002)のpp.170－171も参照。

＊19　百分率は，明治期から現代期までの，各時期の全用例数に対する「想定外」の用例数の割合である。明治期は全84例，戦前期は全103例，戦後期は全77例，現代期は全122例であった（5．3．1．図2参照)。

＊20　注18より，主節が過去である文の従属節に現われた場合の〈トハ＋思考動詞＋ナイ〉も含めた。

＊21　他には，〈トモ＋思考動詞＋ナカッタ〉や「言いさし」(5．3．1および注26を参照）などの用例が見られた。それぞれ1例と4例であった。

(*21－1)　眞逆に君が來ておいでだらうとも思はなかつたのに……何うも飛んだ處を見付かつて，私は今日位驚いた事は無い。(錦木139上)

(*21－2)　「記念に撮影した咲子の写真を，顔の写っていないのを幸いに田所に売った俺も最低の男さ。だが，まさかそいつがおまえの手元に渡るなんてな……馬鹿な話だ」早良は嗚咽をはじめた。(緋い記憶241)

＊22　描出文とは，山田(1957)や工藤(1993)を参考に設定したもので，「」や『』などの，発話文や心中思惟文を表わす標識がないにもかかわらず，地の文中において登場人物が発話や心中思惟をしているような感情的要素に富む文を指す。これは，地の文と会話文の中間に位置づけられるもので，以下のようなものである。

(*22－1)　まさかこんな最後部の車輛まで女連れの吉川が来るはずはない，そう自分に言い聞かせるのだが，前のドアが開くたびに背筋に汗が落ちた。(受け月198)

＊23　本稿では，マイとの関連において，ナイダロウをひとつのモダリティ形式として扱う。ナイダロウに関しては，吉田(1971：315－316)に以下の記述が見られる。

> 「まい」「あるまい」は「ないだろう」に代替されて行くといわれるが，それは東京語的一面に過ぎないもので，「まい」の語感はほとんど「ないだろう」には受け継がれてはいない。「ないだろう」よりもむしろ「ないつもりだ」「ないらしい」「ないに違いない」「ないにきまっている」など種々の語群に拡散しているようである。

このことから，本稿での調査で少数ながらも用例の見られたハズハナイ（7例)，ナイハズダ（2例)，ナイラシイ（1例）という形式もナイダロウに含めることにし，「ナイダロウ類」とした。

＊24　一語文と感動詞の違いとしては，概略，感動詞は他の成分で補充することが

できないのに対し，一語文では拡大補充できるという違いがある（村木2002：83）。その点，マサカは，3．1で述べたように述語を補充できるという点で，一語文と呼びうるものである。

＊25　例として，マイ（a），ナイダロウ（b），形容詞ナイ（c）・用言の未然形＋ナイ（d）を挙げたが，形容詞のナイ以外の形式にはヴァリエーションが見られた。（a）マイ：メエ，マジ（手紙文）／（b）ナイダロウ：ナイダラウ，ナイデショウ（ナイ・ヌデセウ），ナイデショ，ネエダロウ，ナインデセヨウ，ナカツタデアラウ，ナカロウ（ナカラウ）／（d）未然形＋ナイ：ヌ（ン），ズ，ネエ，ナカッタ。なお，ナイダロウとナカロウに関しては鎌田（1963）も参照のこと。

＊26　以下のような例では，マサカは一語のみで用いられているが，その後の“……”によって何かを言おうとしたいのだが言えないという感じを表していると思われるので，「言いさし」として扱った。

（*26－1）　世の中が不景氣で，お米が高くなるばかりの處へ，斯う厄介ばかり多くつては，病氣にかゝらないでもいまに飢死（かつゑしに）です。」　「眞逆‥‥」（五人姉妹172上）

（*26－2）　いいや，何ならじじいもばばあも，まとめて面倒みたろうかい」「そ，そんな。まさか……」　「ふん，造作もねえこった。（鉄道員223）

＊27　「その他」の9例中，ダロウと共起した用例が一番多く見られた（3例）。

（*27－1）　早百合は，佐久間が自分に，つんとしてゐるのが気になつてゐたが，まさかかう云ふ問題にはすぐ賛成するだらうと思つて云つた。（東京行進曲239上）

（*27－2）　「二泊三日か，まさか，三泊は難しいだろうな」（うたかた181）

＊28　マイには「意志の打消」と「推量の打消」の用法があるとされる（奥村1969）。しかし，マサカと共起した場合には「意志の打消」の読みはできず，一義的に「推量の打消」になるものと思われる。また，この「推量の打消」と呼ばれる用法も，注23の吉田（1971）の記述のように，必ずしも推量のみを表わすとは言えないので，本稿では「否定判断」と呼ぶ。

＊29　中村（1948），松村（1998a）にも，同様の記述が見られる。

＊30　田中（1965，2001）も参照。なお，浅野（1943：140）の「分解的表現」，中村（1948：169）の「活字的分離」，田中（1965）の「相加的表現」，山口（1991）の「ムード性の分化・純化」という表現も同様の概念を表しているものと考えられる。また，「分析的」に対立するマイのような表現は，「木版的結合」（中村1948：169），「総合」（中村1955），「相乗的・非分析的」（田中1981）な表現に該当するものと思われる。

＊31　吉田（1971：308）は，マイの一用法として「陳述副詞を伴って強調の呼応をなすことがあ」り，そのうちで「『まさか～まい』の形式をとって，限界を仮定しての意味を強める用法が多い。」と述べている。

＊32　昭和初期の浅野(1933：260)では，「副詞の呼應」の例として「よもや…まい」「まさか…まい」を挙げている。

＊33　小池(2002)では，一語文では用いられにくい副詞としてサゾを挙げている。

＊34　これに対し，タブンは一語文でも用いられ，またさまざまなモダリティ形式とも共起する点で，やきつけられ度はマサカよりも高いと言える。

(*34－1)「あの方から，〈カレーの代金を；筆者注〉お貰いねがえるんですか」「あ……。多分」(あるぷす大将137下)

(*34－2)多分侯爵夫人の御手跡は御當家に残つて居りませう。(乳姉妹238下)

(*34－3)多分セザンヌか誰かの孫弟子か曽孫弟子ぐらゐかも知れませんワ。』(宿命147下)

(*34－4)でもそれはたぶん，もともとの君に感じていた魂みたいなものが，表に出てきただけなんだ。(アムリタ240)

＊35　マサカの用例数は，すでに明治期においてヨモヤを凌駕していることから，さらに江戸期における両副詞の用法を見る必要があるが，それは別の機会に譲る。

＊36　小池(2002)は推量のモダリティ副詞を対象としたものであるが，そこでは「累加型」にオソラクとタブンが，「共起型」にキットが，「呼応型」にサゾとサダメシが，それぞれ該当する副詞として挙げられている。なお，「漸減型」に該当する副詞は見られなかった。

資料一覧　以下のリストは順に〈作品名，初版出版年，作家名，生(没)年；テキスト，テキスト出版年，テキスト出版社；概算文字数〉を表す。

明治期の作品（14）：約2,428,701字　●「金色夜叉」1898，尾崎紅葉(1867-1903)，春陽堂；『精選名著復刻全集　金色夜叉』(前編1898・中編1899・後編1900・續編1902・續々編1903) 1979，日本近代文学館；271,203　●「不如帰」1898，徳冨蘆花(1868-1927)；『明治大正文學全集　第十三巻　徳冨蘆花』1930，春陽堂；143,520　●「無花果」1901，中村春雨(1877-1941)；『現代日本文學全集　第三十四篇　歴史・家庭小説集』1928，改造社；133,560　●「錦木」1901，柳川春葉(1877-1918)；『明治文學全集22　硯友社文學集』1969，筑摩書房；61,824　●「秋袷」1902，柳川春葉；『明治文學全集22　硯友社文學集』1969，筑摩書房；26,880　●「濱子」1902，草村北星(1879-1950)；『明治家庭小説集』1969，筑摩書房；152,320　●「魔風戀風」1903，小杉天外(1865-1952)；『明治大正文學全集　第十六巻　小杉天外』1930，春陽堂；311,480　●「黒潮　第一篇」1903，徳冨蘆花，黒潮社；『徳冨蘆花集第7巻』1999，日本図書センター；203,034　●「乳姉妹」1903，菊池幽芳(1870-1947)；『明治家庭小説集』1969，筑摩書房；272,384　●「良人の自白　上篇」1904，木下尚江(1869-1937)；『明治文學全集45　木下尚江集』1977，筑摩書房；177,408　●「女夫波」1904，田口掬汀(1875-1943)；『明

治家庭小説集』1969，筑摩書房；222,208 ●「青春　春之巻・夏之巻」1905，小栗風葉(1875-1926)；『明治大正文學全集　第十七巻　小栗風葉』1928，春陽堂；238,680 ●「琵琶歌」1905，大倉桃郎(1879-1944)；『明治家庭小説集』1969，筑摩書房；94,080 ●「生さぬ仲　前篇」1912，柳川春葉；『明治大正文學全集　第19巻　柳川春葉　佐藤紅緑』1929，春陽堂；120,120

戦前期の作品（14）：約2,794,430字 ●「五人姉妹」1915，柳川春葉；『現代日本文學全集　第五十五篇　小栗風葉集・柳川春葉集・佐藤紅緑集』1931，改造社；140,616 ●「宿命」1918，沖野岩三郎(1876-1956)；『近代日本キリスト教文学全集　5』1975，教文館；243,880 ●「火華」1922，菊池寛(1888-1948)；『菊池寛全集　第五巻　長篇小説集一』1994，文藝春秋；254,982 ●「空華」1922，久米正雄(1891-1952)；『現代小説全集　第五巻』1926，新潮社；144,000 ●「破船　前篇」1922，久米正雄；『現代日本文學全集　第三十二篇　近松秋江集・久米正雄集』1928，改造社；173,880 ●「緑の路」1925，小栗風葉；『現代日本文學全集　第五十五篇　小栗風葉集・柳川春葉集・佐藤紅緑集』1931，改造社；147,420 ●「真珠夫人」1925，菊池寛；『菊池寛全集　第五巻　長篇小説集一』1994，文藝春秋；351,624 ●「第二の接吻」1925，菊池寛；『菊池寛全集　第七巻　長篇小説集三』1994，文藝春秋；162,656 ●「赤い白鳥」1927，菊池寛；『菊池寛全集　第七巻　長篇小説集三』1994，文藝春秋；149,500 ●「東京行進曲」1928，菊池寛；『菊池寛全集　第八巻　長篇小説集四』1994，文藝春秋；184,314 ●「かんかん虫は唄う」1930，吉川英治(浜帆一)(1892-1962)；『吉川英治全集　10』1983，講談社；131,600 ●「あるぷす大将」1933，吉川英治（浜帆一）；『吉川英治全集　10』1983，講談社；190,568 ●「人生劇場」1933，尾崎士郎(1898-1964)；『日本現代文學全集72　尾崎士郎・坪田譲治集』1962，講談社；287,100 ●「若い人　前篇」1933，石坂洋次郎(1900-86)；『日本現代文學全集86　石坂洋次郎・石川達三集』1961，講談社；232,290

戦後期の作品（15）：約2,700,699字 ●「土曜夫人」1946，織田作之助(1913-47)；『定本　織田作之助全集　第七巻』1971，文泉堂書店；142,272 ●「地底の歌」1948，平林たい子(1905-72)；『新選　現代日本文學全集18　平林たい子集』1959，筑摩書房；117,327 ●『石中先生行状記』1949，石坂洋次郎，新潮社，初版本；231,880 ●「雪夫人絵図」1950，舟橋聖一(1904-76)；『新選　現代日本文學全集14　舟橋聖一集』1958，筑摩書房；230,433 ●「武蔵野夫人」1950，大岡昇平(1909-88)；『日本文學全集64　大岡昇平集』1962，新潮社；146,616 ●「風ふたたび」1951，永井龍男(1904-90)；『永井龍男全集　第5巻』1981，講談社；167,328 ●「四十八歳の抵抗」1956，石川達三(1905-85)；『昭和国民文学全集27　石川達三集』1979，筑摩書房；218,504 ●『おとうと』1957，幸田　文(1904-90)，中央公論社，5版1957.11.25（初版1957.9.27）；164,475 ●「白い罌粟」1965，立原正秋(1926-80)；『立原正秋全集　第三巻』1983，角川書店；81,900

●「奇病連盟」1966，北杜夫(1927-)：『北杜夫全集７』1977，新潮社；200,278 ●「蒼ざめた馬を見よ」1967，五木寛之(1932-)；『昭和文学全集　第26巻』1988，小学館；53,460 ●『さびしい王様』1969，北杜夫，新潮社，初版本；348,480 ●『青春の門　第二部　自立篇上』1971，五木寛之，講談社，初版本；208,170 ●『立ち盡す明日』1971，柴田翔(1935-)，新潮社，初版本；122,976 ●『恍惚の人』1972，有吉佐和子(1931-84)，新潮社，初版本；266,600

現代期の作品(15)：約2,901,656字 ●『もう頬づえはつかない』1978，身延典子(1955-)，講談社，初版本；88，312 ●『ナポレオン狂』1979，阿刀田高(1935-)，講談社，初版本；198,918 ●『人間万事塞翁が丙午』1981，青島幸男(1932-)，新潮社，初版本；200,466 ●『なんとなく，クリスタル』1981，田中康夫(1956-)，河出書房新社，23版1981．2．26（初版1981．1．20）；64,610●『恋文』1984，連城三紀彦(1948-)，新潮社，初版本；148,608 ●『旅の幻燈』1986，五木寛之，講談社，初版本；224,010 ●『うたかた　上』1990，渡辺淳一(1933-)，講談社，初版本；205,884 ●『緋い記憶』1991，高橋克彦(1947-)，文藝春秋，初版本；213,624 ●『受け月』1992，伊集院静(1950-)，文藝春秋，初版本；183,438 ●『アムリタ　上』1994，吉本ばなな(1964-)，福武書店，初版本；176,640 ●『失楽園　上』1997，渡辺淳一，講談社，初版本；231,420 ●『鉄道員』1997，浅田次郎(1951-)，集英社，初版本；197,316 ●『女たちのジハード』1997，篠田節子(1960-)，集英社，初版本；381,840 ●『プラナリア』2000，山本文緒(1962-)，文藝春秋，初版本；178,364 ●『ビタミンＦ』2000，重松清(1963-)，新潮社，初版本；208,206

参考文献

浅井　清(1978ａ)「大衆文学の端緒」，市古貞次・三好行雄編『日本文学全史５　近代』：pp.135-150，學燈社

――――(1978ｂ)「大衆文学の成立」，市古貞次・三好行雄編『日本文学全史５　近代』：pp.577-593，學燈社

浅野　信(1933)『巷間の言語省察』，中文館書店

――――(1943)『日本文法辞典　口語篇』，八弘書店

奥村三雄(1969)「まい－打消の推量〈現代語〉」，松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』：pp.238-242，學燈社

尾崎秀樹(1978)「大衆文学の〈現代〉」，市古貞次・三好行雄編『日本文学全史６　現代』：pp.375-396，學燈社

――――(1986)「変貌する大衆文学－大衆文学の論理－」，『國文學』31-９：pp.36-41，學燈社

鎌田廣夫(1963)「『ないだろう』考」，『人文論究』23：pp.81-91，北海道学芸大学（現北海道教育大学）

工藤　浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3　モダリティ』：pp.161-234，岩波書店
工藤真由美(1993)「小説と地の文のテンポラリティー」『ことばの科学6』：pp.19-65，むぎ書房
小池　康(2002)「副詞の共起形式に関する史的変遷-推量のモダリティ副詞を中心に-」『日本語科学』12，国立国語研究所（印刷中）
小矢野哲夫(1997)「疑似モダリティの副詞について－「まるで」を例として－」『国語論究6　近代語の研究』：pp.287-318，明治書院
近藤泰弘(1989)「ムード」『講座日本語と日本語教育4　日本語の文法・文体(上)』：pp.226-246，明治書院
塩澤実信(1995)『ベストセラーの光と影』，グリーンアロー出版社
小学館辞典編集部(1994)『使い方の分かる類語例解辞典』，小学館
杉村　泰(2000)「モダリティ副詞「マサカ」再考」『名古屋学院大学　日本語・日本語教育論集』7：pp.11-29
鈴木貞美(1997)「大衆文学の展開」『時代別日本文学史事典　現代編』：pp.56-65，東京堂出版
鈴木英夫(1986)「現代日本語研究における資料の取り扱いについて」『松村明教授古希記念国語研究論集』：pp.750-769，明治書院
瀬沼茂樹(1965)「大衆文学略史」『國文學』10-2：pp.12-17，24，學燈社
田中章夫(1965)「近代語成立過程にみられるいわゆる分析的傾向について」『近代語研究　第一集』：pp.13-25，武蔵野書院（田中2001に再録）
――――(1981)「近代語(明治)」『講座日本語学3　現代文法との史的対照』：pp.161-189，明治書院（田中2001に再録）
――――(2001)『近代日本語の文法と表現』，明治書院
辻村　明(1981)『戦後日本の大衆心理』，東京大学出版会
中右　実(1994)『認知意味論の原理』，大修館書店
中村通夫(1948)『東京語の性格』，川田書房
――――(1955)「近代日本語のあゆみ」『講座日本語Ⅱ　日本語の構造』：pp.213-229，大月書店
仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』，ひつじ書房
――――(1997)『日本語文法研究序説』，くろしお出版
――――(2000)「認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法3　モダリティ』：pp.79-159，岩波書店
長谷川泉・武田勝彦編(1977)『国文学解釈と鑑賞　現代新聞小説辞典』42-15，學燈社
浜田雄介(1996)「大衆文学の近代」『岩波講座　日本文学史13・二〇世紀の文学2』：pp.153-187，岩波書店

飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』，東京堂出版
益岡隆志(1991)『モダリティの文法』，くろしお出版
――― (2000)「モダリティ」『別冊國文學　現代日本語必携』：pp.140-143，學燈社
――― (2002)「判断のモダリティ-現実と非現実の対立-」『日本語学』21-2：pp. 6-16
松村　明(1998 a)「東京語の実態」『増補　江戸語東京語の研究』：pp.119-137，東京堂出版（『国語学』7，1951の再録）
――― (1998 b)「東京語の成立と発展-現代の国語-」『増補　江戸語東京語の研究』：pp.86-118，東京堂出版（『国文学解釈と鑑賞』19-10，1954の再録）
宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃(2002)『モダリティ』，くろしお出版
村木新次郎(2002)「日本語の文のタイプ・節のタイプ」，飛田良文・佐藤武義編『現代日本語講座5　文法』：pp.79-100，明治書院
森田良行(1989)『基礎日本語辞典』，角川書店
森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』，くろしお出版
柳田泉・勝本清一郎・木村毅・猪野謙二(1961)「明治の大衆文学」『座談会明治文学史』：pp.475-527，岩波書店
山口堯二(1991)「推量体系の史的変容」『国語学』165：pp.26-37
山田良治(1957)「現代作家と代行描写」『言語生活』9：pp.57-64，筑摩書房
吉田金彦(1971)『現代語助動詞の史的研究』，明治書院